

学習者を取り巻く状況変化と国語科教育

——学習者を取り巻く状況としての教師（大人）——

余郷裕次

はじめに

福音館書店の創業以来、絵本の出版に携わり、ご自身児童文学者である松居直氏は、子どもを取り巻く状況について次のように指摘している。

近頃の子どもの生活をみていますと、家庭で一番子どもに語りかけているのは、母親——ではありません。テレビです。子どもはテレビの前に一時間でも二時間でもすわっています。テレビはとめどもなく子どもに語りかけています。テレビが子どもを育てているようです。ところがおかあさんは、一日に何時間ぐらい子どもに語りかけているでしょうか。朝、子どもが目をさますときから寝るまで、声をかけています。早く起きないと遅れますよ、からはじまって、ちゃんと寝間着に着がえてねるのですよ、にいたるまで、きりなく声をかけてはいますが、あれは子どもに語りかけているではありません。テレビと母

親を比べると、テレビのほうが圧倒的に優勢です。まして父親においておや？です。『わたしたちがテレビを見ているのではない。テレビがわたしたちを見るのである』といわれる時代です。わたしたち親は、もう一度子どもにちゃんと語りかける時間を持つべきです。それも楽しい時間を……。』（絵本とは何か）一九七三 日本絵ディタースクール出版部 10～11頁）

学校で、国語科の授業を全部テレビに任せている教師はいないと思うが、教室で、生徒に「ちゃんと語りかけ」ている教師も少ないのではないか。教師（大人）が学習者（子ども）に語りかけなくなったことが、学習者（子ども）を取り巻く状況の大きな変化であり、問題点であるように思える。国語科の教師こそ「もう一度子どもにちゃんと語りかける時間を持つべき」だろう。

そこで、今回の研究協議に登壇された三人の実践報告を、学習者を取り巻く状況としての教師（大人）の語りという観点から、捉えなおしてみた。

一 学習者を取り巻く状況としての教師の語り

大里康暁氏（広島県熊野中学校）は、学習者を取り巻く現在の状況として、次のような項目を列記し、それぞれに言及した。

○情報機器は身近なものではない。

○テレビゲーム

○夜更かし

○家庭の変化

○習い事

○子ども会の崩壊

○学校批判・学校不信・対教師批判

○家庭の多様化・価値観の多様化

●自然との距離は近い。

大里氏は、これらの項目の中で、「○家庭の変化」について、次のように指摘した。

・若い親が多い。金髪の母親も目立つ。授業参観の時に、ガムを噛み続ける親、おしゃべりを止めない親もいる。

・親が楽しむ。カラオケ・パチンコ。

・子どもに注意できない。物わかりのいい親（子どもに対しては）が多い。

「学校批判・学校不信・対教師批判」

・どの親からも強く感じる。このことが子供に伝わっている。

・問題のすり替えが多い。たとえば、いじめ。保護者を呼んでも、相手（いじめられた側）の悪いところをあげるばかり。

開き直り。保護者を呼ぶことでかえって混乱することが非常に多い。

ここからは、大里氏が、学習者を取り巻く問題状況を、大人の変化の問題として捉えていることがうかがえる。

大里氏は、二〇〇〇年度中学二年生の授業で意識したこととして、「話す」と「聞く」をあげた。実践を振り返って大里氏は次のように述べた。

授業の雰囲気は、昨年度に比べても良くなったように思う。

これまで「理解しているはず」「ここはわかるだろう」と飛ばしてきたことを、踏みとどまって言葉にし、板書にしてみた。

うなずく雰囲気が出てきた。また、生徒が活動する場面が増え、評価できる内容が幅広くなり、昨年度は見えなかった生徒それぞれの特長もみえてくるようになった。

厳しい見方をすれば、大里氏の授業は、教科の内容の一方的な注入になる傾向があったのではないか。それを、「踏みとどまって」生徒に自分のことばで「語りかける」ことによって、何かが変わったのである。

私は、大里氏の教室に「語りの場」が成立したと考える。教師が情報の一方的な注入を止めて、語りかけた時、「うなずき」ながら語りを聞く生徒が生まれたのである。

大里氏の教室に起こったのは、生徒を取り巻く状況としての教師が変わったとき、生徒も変わったということである。具体的には、教師が自分のことばで「語る」という原点に戻ったとき、生徒の体に聞く姿勢が生まれたということである。

一度、この「語り」の効果と魅力に触れると、もうもとの教科内容を注入するような機械的な授業に戻ることはできないと考える。大里康曉氏の次の報告が楽しみである。

二 学習者を取り巻く状況としての教師の柔軟性

福島浩介氏は、「千里国際学園に足掛け十年勤務して、この、特異な学校での「様々な状況に取り囲まれた」生徒たちに対する教育実践を紹介し、この研究協議のヒントとすることができれば幸いである。」と述べた。

福島氏は、千里国際学園について次のように紹介した。

この学園は、平成三（一九九一）年帰国子女の受け入れを主たる目的として、外国人子女や一般国内生徒も共に学ぶ新国際学校の理念をもって創立された。

本学園では、様々な背景を持った生徒を受け入れ教育するための試行錯誤をこの十年間行ってきた。学年途中での編入学生、また、国際学校との相互乗り入れによる年度の開始・終了の違いの問題も加わり、カリキュラムの構成は大変な作業になっていた。更に、開校当初から選択の幅の広いカリキュラムであり、第二外国語、コンピュータなどの科目も開講されていたため、時間割の編成はアクロバティックなものになっていた。

福島氏は、中等部一年次から高等部三年次まで、いくつかの実践を報告したが、その中で、「レポートの書き方実習」という実践について次のように報告した。

本学園では、中等部から様々な教科でレポートの提出が課されるが、それぞれの教科によって、体系的にその書き方の指導が行われていたわけではない（英語科はのぞく）。そこで、各教科から担当者ごとに専門領域から数個の題材を提示してもらい、生徒がその中から選択して、指導担当者（大袈裟に「指導教官」と呼んでいた）につき、取材・構成・下書きの三段階で必ず「指導教官」に点検を受けることにした。使用する言語は日本語である。また、論文の構成は必ず、序論・本論・結論という形をとり、目次も必ずつけることにした。分量的には、四〇〇字詰め原稿用紙で五枚以上ということにしたが、かなり細かく枠組みが決められていたため、また、必ず定期的に教員の指導を受けなければならないため（三つの段階で担当教員のサインをもらう用紙をつくり、レポートの表紙に添付して提出することを義務づけた）、それぞれ興味、また、能力に応じて着実に取り組むことが出来たようである。

書くことの指導において、興味が尊重され、能力に応じて取り組むことが出来、個別指導が保証されていることは、ひとつの優れたあり方と言えよう。

また、段階ごとに、「指導教官」のチェックを受けることが義務づけられていることは、主体性を尊重することと矛盾するようにも思われるが、全員に確実に個別指導の機会を保証するシステムと見ることもできる。

千里国際学園では、「様々な状況に取り囲まれた」生徒に対応する「アクロバティック」なカリキュラム編成に象徴されるような、

「様々な状況に取り囲まれた」生徒に対応できる柔軟なシステムを創出できる教師が求められているようである。

しかし、福島氏が報告した「多様な背景を持つ学習者に対応する試み」とは、千里国際学園固有の課題ではなく、あらゆる学校の課題であり、あらゆる教師の課題であろう。

三 学習者を取り巻く状況としての教師のことば・声

吉岡和男氏（広島県立東城高校）は「学習者を取りまく状況の変化中でたいせつにしたいもの」と題して報告した。

吉岡氏は、「大切にしたいもの」として、次のように指摘した。

「状況の変化」に対応するコミュニケーションの手段として、コンピュータの導入や、英語学習に力を入れるなどのことは、一応もつともなことであろう。しかし、それらが何をどう受けとめ伝えるためのものであるのか、学習者にとって、あるいは、私たち自身にとっての必然性が明確にされるべきである。

「私たち自身」というのは、もちろん、国語科教師としての私たち自身である。情報技術の急速な変化の中で、情報機器に振り回されている国語科教師への警鐘と言える。

情報技術の急速な変化という状況の中で、言語生活を教育内容とする我々国語科教師はどうあるべきなのか。吉岡氏は、次のように指摘された。

言葉の機能をどう教えるかということ、言葉への感性をどう育てるかという問題がある。言葉の必然性、自分の生きてい

ることから発する言葉への内的根拠を、ひとつひとつ見つけていくことが大切。

吉岡氏は、学習者も教師も自分のことばを足下から見つめ直すことを勧めているようだ。自分自身のことばの再発見について、吉岡氏は、次のように提案した。

言葉は信頼関係を築くためのものであること。そのために、等身大の自分を素朴に語れるようにすること。そのために、自分の言葉を探し、見つけること。その過程の中から、他者の言葉の語感を受けとめようとこだわること。

「等身大の自分を素朴に語れる」ことは、学習者にそれを要求する前に、教師自身が身をもって示さなければならぬことであろう。

吉岡氏は、自己の存在確認につながることばの再発見を促す具体的な試みとして、いくつかの提案をされた。その中の一つ「言葉のスケッチ」を次に示す。

ア、言葉のスケッチ

周りのものへの認識と、それを通しての自己との出会い。

そのものの自分にとっての意味づけ、自分との関わりの発見。それらを言葉で定着させる。

これは、教師自身が使うことばにも通じるものである。教師が「自分自身にとっての意味づけ」を明確にすることばを使うことが、学習者を取りまく状況としての教師のことばのあるべき姿であろう。

また、吉岡氏は、非常に魅力的な声の持ち主だった。自分の声

を持っている。研究協議の間も終始、自分のことばを自分の声にのせて語るという風情だった。教室における吉岡氏の授業が想像される。

おわりに

研究協議に登壇された三人の実践報告を、学習者を取り巻く状況としての教師（大人）の語りという観点から、捉えなおしてみた。

学習者を取り巻く言語環境として、国語科教師の役割は大きいし、学習者にとって最も身近な他人の大人である教師の責任は重大である。

自分自身の貧弱な声を思うと、吉岡和男氏の豊かな声に強い憧れを覚える。吉岡氏は、大学時代、グリークラブに所属していたそうだ。吉岡氏の声には、それなりの訓練の歴史もある。しかし、それ以上に、自分の声にのせることばへの責任感、ことばへの深い自覚に感動を覚えた。吉岡氏のような豊かな声を一朝一夕で身につけることはできない。しかし、国語科教師として、自分の声にのせることばへの責任感と自覚とは深く胸に刻まなくてはならない。与えられた教科内容をそのまま注的に教えるようなことは、活字や機械に任せておけばよいのである。教科内容や教材の内容の「私たち自身にとっての必然性」をことばにして自分の声にのせなければならぬ。

教師が、教科内容や教材の内容の教師自身にとっての必然性を明確にし、「自分の生きてることから発する言葉への内的根拠」

を語るからこそ、学習者を取り巻く状況として、国語科教師が、学習者に保証しなければならないことであろう。リチャード・ピーチは、教えることを「あなた自身がよく知っているのと同じように、他の人に知らせることである。」と定義している。

最後に確認したいのは、学習者（子ども）の変化の責任は、すべて教師（大人）の側にあるということである。学習者（子ども）の変化は、教師（大人）の変化の反映である。学習者（子ども）を変革するためには、教師（大人）自身が変革するしかない。

今こそ、国語科教師は、自分自身に忠実に教科内容や教材の内容を捉えなおし、「私たち自身にとっての必然性」を明確にしながら、「自分の生きてることから発する言葉への内的根拠」を語り始めるべきである。

いきなり語り始めるのが難しいのであれば、「絵本」という教材を用意し、「読み聞かせ」という形態を借りて、「自分の生きてること」を語ってみるのはどうだろうか。

私も、学習者を取り巻く状況として「等身大の自分を素朴に語るようにすること」を心がけたい。

（鳴門教育大学）